

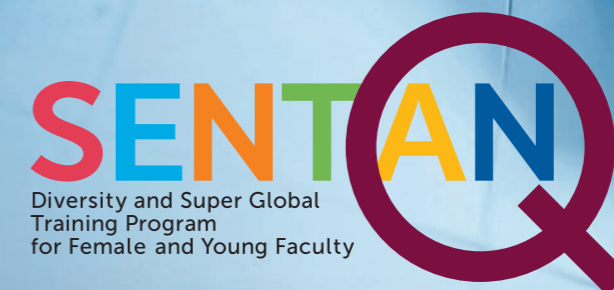
2022年3月
発行

文部科学省科学技術人材育成費補助事業
ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(先端型)

ダイバーシティ・スーパーグローバル教員育成研修

令和3年度事業報告書

SENTAN-Q Annual Report 2021



九州大学男女共同参画推進室

〒819-0395 福岡市西区元岡744 TEL.092-802-2034 / FAX.092-802-2038
E-mail: office@danjyo.kyushu-u.ac.jp URL: <https://sentan-q.kyushu-u.ac.jp/>



九州大学

事業報告書 目次



| | |
|---------------------------------------|-----------|
| ご挨拶 | 2 |
| 総括責任者 石橋 達朗 総長 | 2 |
| 実施責任者 内藤 敏也 理事 | 3 |
| コーディネータ 玉田 薫 副学長 | 3 |
| 1 SENTAN-Q概要 | 4 |
| 2 2021年(令和3年)度実施状況 | 6 |
| STEP1 第3期研修生の選定(公募から審査まで) | 6 |
| STEP2 大学ガバナンス、ダイバーシティ・インクルーシブ教育(国内研修) | 6 |
| STEP3 英語でのアクティブラーニング型教授法教育(国内研修) | 6 |
| STEP4 留学生への英語での実践的研究指導(国内研修) | 7 |
| STEP5 最新学問分野等へのリカレント教育(国内研修) | 7 |
| STEP6 海外での実践的教育・研究指導(海外研修) | 7 |
| 3 トピック | 8 |
| イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校におけるDEI戦略について | 8 |
| 4 第1期生修了式報告 | 10 |
| 第1期研修生 修了認定式および修了報告会 | 10 |
| 5 第1期生修了報告 | 12 |
| 6 研修生の紹介 | 17 |
| 第2期研修生 | 17 |
| 第3期研修生 | 22 |
| 7 今後に向けて | 28 |
| 8 附録(資料集) | 29 |
| 応募要領 | 30 |
| 推薦様式 | 32 |
| 実施要領 | 40 |
| 「無意識のバイアス」チェックシート | 46 |



【SENTAN-QホームページURL】
<https://sentan-q.kyushu-u.ac.jp/>

3年目を迎えました「ダイバーシティ・スーパーグローバル教員育成研修(SENTAN-Q)」の2021年度の報告書をお届け致します。研修の概要・実績をはじめ、2年間の研修を修了した1期生の報告を掲載しています。

本書の作成に際し、御協力頂きました関係の皆様にご心よりお礼申し上げます。

2022年3月

九州大学男女共同参画推進室 相良 祥子

■ 総括責任者

九州大学は、2021年11月に文部科学大臣より「指定国立大学法人」に指定されました。この指定を契機に、本学は今後10年間で目指すべき姿として「Kyushu University VISION 2030」を策定しました。このビジョンをもとに、社会的課題の解決とそれによる社会・経済システムの変革に貢献する「総合知で社会変革を牽引する大学」となることを目指しています。

多様なアプローチによる自由闊達な研究と、それらが基盤となって生み出される先端研究、そして未来を拓く探求心旺盛な学生を育てる教育のためには、女性や若手、外国人を含むすべての構成員が、個人の能力を最大限に発揮できる環境が不可欠です。そのためには、女性研究者の積極的な採用や上位職への登用、女性研究者の研究力向上を通じた女性リーダーの育成が重要な鍵を握ってきます。本学は、多様な視点を確保した研究環境の実現のため、2019年度文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(先端型)」の採択を受け、2020年1月より「ダイバーシティ・スーパーグローバル教員育成研修(SENTAN-Q)」を実施しております。

SENTAN-Qでは、優れた研究業績を有する将来有望な本学の女性および若手教員が、海外のトップレベルの研究者による本研修を受けることなどにより、国際的に通用する研究教育力を実践的に身につけることを目的とします。さらに本事業により育成された女性および若手教員の上位職ならびに管理職への登用を大幅に加速させ、本学がグローバルな研究教育大学として国際社会に認められる研究教育環境を整えることを目指します。

研修生の選考にあたっては、学外有識者を含む審査会を開催し、透明性の高い審査を経て決定し、毎年10名程度の優れた人材を選出します。2年間の研修期間修了後、目標レベルに到達した研修生は1年以内の1段階昇任を原則としています。

事業開始から早くも3年目を迎えた本年度は、2019年選定の1期生10人、2020年選定の2期生10人に加えて、2021年7月に選定された3期生11名が、COVID-19の影響を受けながらもオンラインを活用して大いに研鑽を積んでいるところです。2021年12月には、ライフイベントによる延長者を除いた1期生7名が2年間の研修を無事に修了し、今年2月に認定書の交付を受けました。

SENTAN-Qでは、補助事業期間中の6年間で6期生まで選出します。本事業を大いに機能させ、九州大学をさらに発展、成長させたいと考えておりますので、皆様のご理解とご支援の程、宜しく申し上げます。



九州大学 総長

石橋 達朗

■ 実施責任者

様々な分野で女性の活躍をはじめ多様な人材による活力のある社会の形成に向けた取り組みが進められている中、2021年11月に「指定国立大学」の指定を受け、世界的な教育・研究拠点大学として、さらなる飛躍を図る九州大学においても、多様な人材が活躍する基盤の整備、とりわけ女性研究者の積極的な採用・登用は、多様な視点や発想から研究活動を活性化させる上で極めて重要な課題です。

これまでも、九州大学は、女性枠による採用、配偶者帯同雇用制度の導入、育児と研究を両立させるための支援制度の整備など、男女共同参画に向けた様々な取り組みを進めてきましたが、2019年7月に文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(先端型)」の採択を受け、国際通用性があり次世代の教育研究をリードする女性ならびに若手教員を育成することを目的として、2020年1月より「ダイバーシティ・スーパーグローバル教員育成研修(SENTAN-Q)」をスタートさせました。

九州大学では、このSENTAN-Qにより、世界的な研究者を多く輩出することを通じ、教育研究における男女共同参画を一層推進するとともに、九州大学が世界有数の研究大学として躍進するための重要な事業として取り組んでいます。

2020年1月からの1期生に加え、同年8月からは2期生、2021年7月からは3期生が研修を実施しています。コロナ禍により海外のトップレベルの研究者からの指導などが当初の計画どおりには進まない部分もありましたが、むしろ、ニューノーマルのもとで、オンラインにより国際水準の研究教育を実践する機会と捉え直し、精力的にプログラムを進めています。こうした取り組みにより、2021年12月には「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(先端型)」の中間評価において「総合評価S」の評価をいただきました。

さらに、1期生のうち7名については、その優れた研修成果により修了認定を受け、去る2022年2月10日に修了式を行ったところです。

本事業の実施にあたっては、海外を含めた他大学との連絡・調整、学内での体制整備などで多くの関係者の皆様にご尽力いただきました。この場をお借りして、改めて心より感謝申し上げます。

■ コーディネータ

SENTAN-Q3年目の2021年度もまたコロナ禍のなか終わろうとしています。研修生には、せっかくの海外渡航のチャンスを諦め、オンラインでの国際共同研究に切り替えていただくなど、大変な負担を強いてしまっていること、申し訳なく思っています。そんな逆境にもめげず、1期生から3期生まで総勢31名のSENTAN-Q研修生が順調に研修を進めている姿に感服しています。おかげさまで本年度実施された中間評価ではS評価をいただきました。これもコロナ禍にありながら継続してプログラムを支援してくれている海外講師・メンターの先生方、九大関係者、そして研修生の向上心の賜物であると思います。

この1月には、ライフイベントによる延長者を除く1期生全員が無事研修を修了し、今後1年以内に1段階内部昇任されます。おめでとうございます。ですが、どの職業であっても、上位職登用は登用されること自体が目的ではなく、登用によって責任と自由を獲得し、自分の夢を具現化させていくことが本当の目的であると思います。研修生の皆様には、SENTAN-Qでの学びを生かし、広く世界へと活躍の場を広げていただくことを期待しています。

私も今年還暦を迎えましたが、長寿社会になった今学びの時間はまだまだ続きます。私も研修生と一緒にSENTAN-Q講習を受けることで、常にフレッシュな気持ちを保つことができているように感じます。プログラムコーディネータとして、今後も挑戦的にプログラム運営をして参りたいと思います。皆様のご協力とご理解をよろしくお願いいたします。



九州大学理事・事務局長
男女共同参画推進室 室長

内藤 敏也



九州大学副学長・主幹教授
男女共同参画推進室 副室長

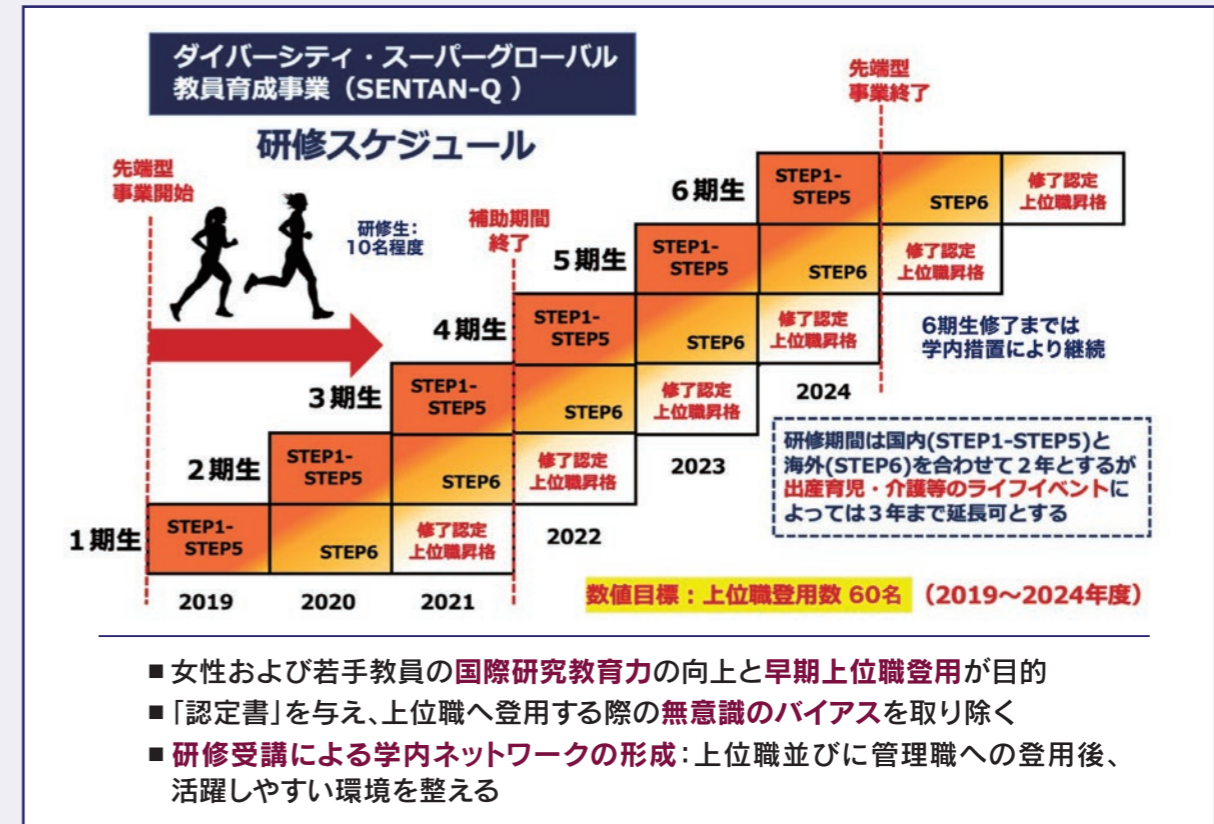
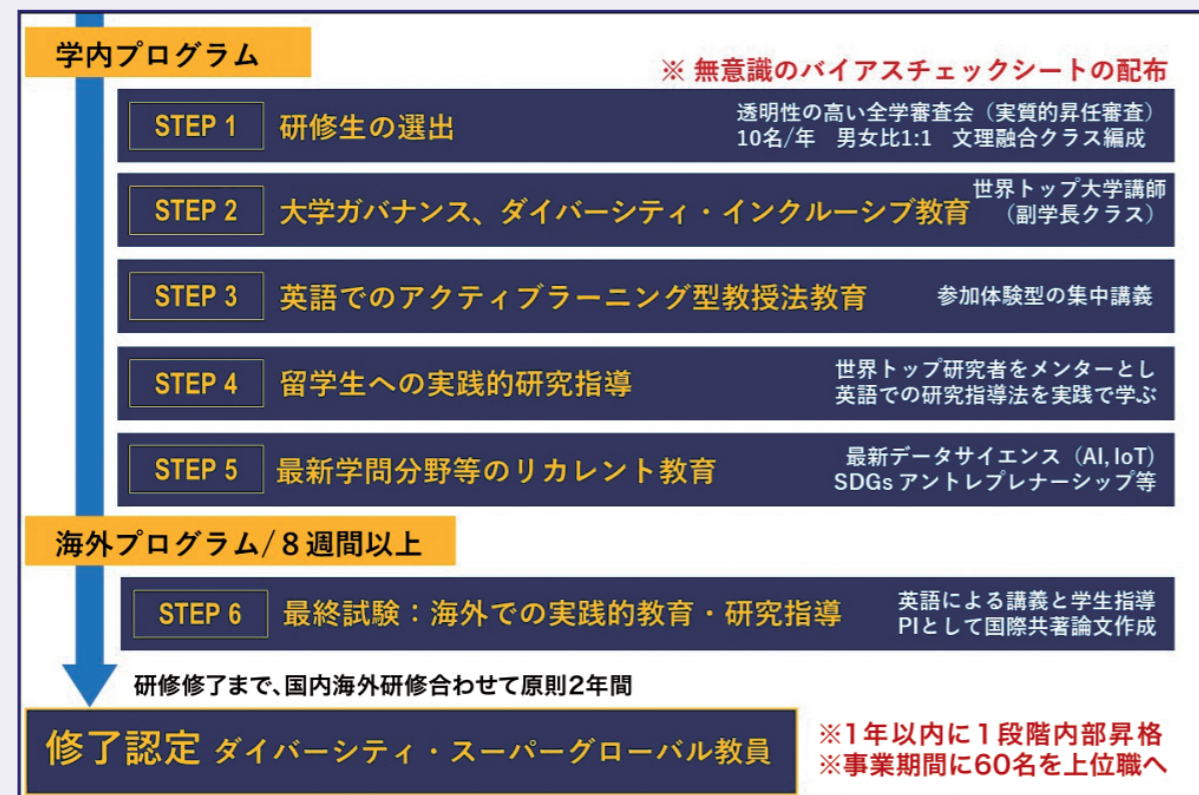
玉田 薫

九州大学は2019年度文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(先端型)」に選定された。本事業は研究環境のダイバーシティを高め、優れた研究成果の創出につなげるため、特に先端型では女性研究者の海外派遣や当該者の帰国後の活躍促進等を通じた上位職登用の一層の推進や、女性研究者の活躍促進を踏まえたより広いダイバーシティ研究環境を形成する取組みを支援している。

九州大学では、女性および若手研究者の活躍をもって世界と伍して戦える強い九州大学を実現すべく「ダイバーシティ・スーパーグローバル教員育成研修(SENTAN-Q)」を実施する。本事業により世界トップレベルの研究教育力を実践的に身につけることで、女性および若手教員の上位職ならびに管理職への登用を大幅に加速させ、真にグローバルな研究大学として国際社会に認められる研究教育環境を整えることを目指す。

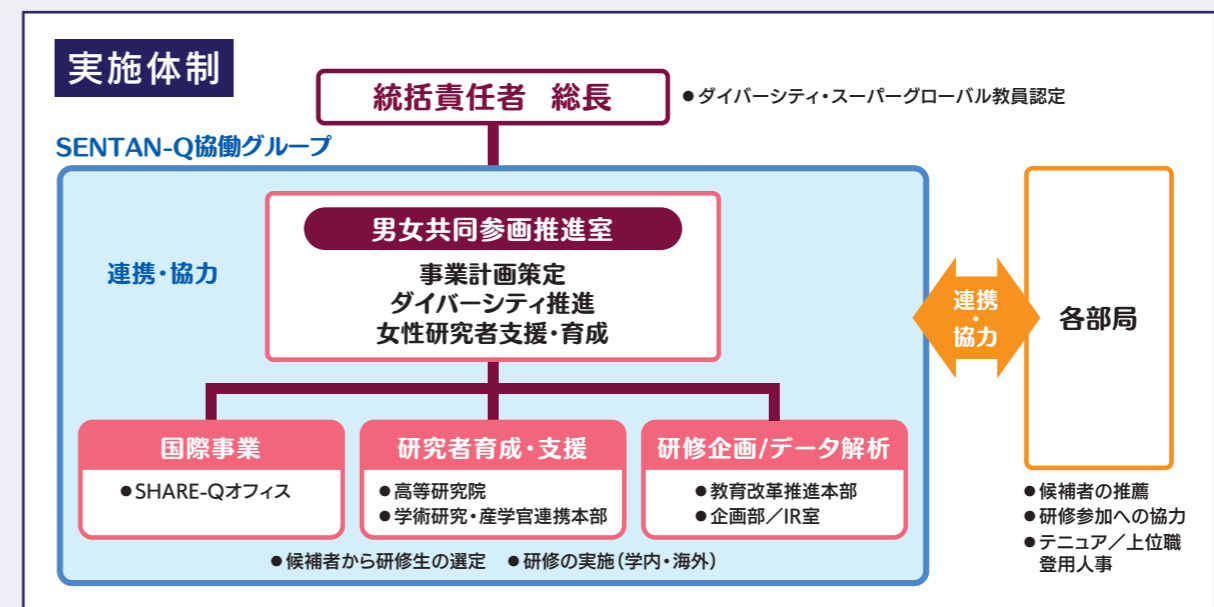
SENTAN-Qは、以下の図に示すようにSTEP1からSTEP6により構成される。STEP1では2-3年以内に上位職あるいは管理職に登用することが見込まれる部局推薦の優秀な女性ならびに若手教員の中から、透明性の高い全学の審査会を経て研修生を選出する。研修生に選出されると2年間の研修が始まり、STEP2、STEP3、STEP4、STEP5の国内研修を経て、8週間以上の海外研修を含むSTEP6へと進む。
(各STEPの内容の詳細については附録参照)

SENTAN-Q 6つのSTEP



本研修で目標レベルに到達した教員には「認定書」を与え、テニユアの付与あるいは1段階の内部昇格をすることを基本とする。研修期間は国内・海外合わせて原則2年とするが、出産育児・介護等のライフイベントに対しては柔軟に対応する。SENTAN-Q研修制度による内部昇格での上位職登用の目標値は本事業実施期間の6年間で60名とする(6期生まで)。研修プログラムの内容は、研修生の業績データ等とともに九州大学男女共同参画推進室発行の学術雑誌「ポリモルフィア(ISSN 2424-1113)」において誌面発表するとともに、全国ダイバーシティネットワーク等と協力し、知見の全国的普及・展開を進める。

本事業は、九州大学が掲げる中期目標・中期計画、国立大学経営改革促進事業等にある「若手・女性・外国人」を中心に据えた経営改革の一環として、全学協力体制のもと遂行する。



昨年度に続き、COVID-19の感染拡大防止による海外渡航制限のため、STEP2およびSTEP3についてはオンラインでの研修となった。事業開始から3年目を迎えた今年度は、本プログラムの海外モデル校であるイリノイ大学アーバナ・シャンペーン校に講師を依頼し、8月～9月にSTEP2を、10月～12月にSTEP3を実施した。

STEP1 第3期研修生の選定(公募から審査まで)

3期生は、部局推薦を3月1日(月)から5月10日(月)に募集し、書面審査、ヒアリングによる面接審査を経て11名の研修生を選出した。7月26日(月)にキックオフミーティングを開催し、8月から2年間の研修をスタートさせた。

STEP2 大学ガバナンス、ダイバーシティ・インクルーシブ教育(国内研修)

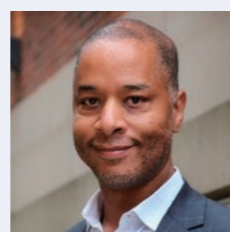
3期生
第1回

日 程：2021年8月24日(火)8:30～10:00(JST)
講 師：Reitumetse Obakeng Mabokela 副学長(国際戦略担当)
イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校
テーマ：Higher Education Governance in the United States



3期生
第2回

日 程：2021年9月17日(金)8:30～10:00(JST)
講 師：Sean Garrick副学長
(ダイバーシティ、エクイティ&インクルージョン)
イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校
テーマ：A vision for equity, diversity and inclusion



STEP3 英語でのアクティブラーニング型教授法教育(国内研修)

講 師：David Favre 専門職員
Center for Innovation in Teaching & Learning、イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校

3期生
第1回

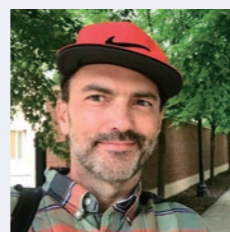
日 程：2021年10月12日(火)8:30～10:00(JST)
テーマ：Active Learning in Lectures

3期生
第2回

日 程：2021年11月9日(火)8:30～10:00(JST)
テーマ：研修生による模擬授業とフィードバック

3期生
第3回

日 程：2021年12月7日(火)8:30～10:00(JST)
テーマ：研修生による模擬授業とフィードバック



STEP4 留学生への英語での実践的研究指導(国内研修)

研修生は自ら選んだ海外メンターとオンラインを活用した打ち合わせを重ね、本学留学生に対し論文執筆に至る研究指導を行った。今年度は、2020年8月からSTEP4を開始した2期生(女性5名、男性5名)が、7月までに国際共著論文を完成させることができた。現在、3期生がSTEP4に取り掛かっている。

STEP5 最新学問分野等へのリカレント教育(国内研修)

専門分野を異にする学内教員を講師に、2科目以上受講する。各期の研修生は、STEP3を終了した頃から随時実施中である。既に提出された報告書からは、研究開発へ向けた新たな視点の開眼など、今後の研究活動の枠を広げる効果があったことが分かる。また、講師を依頼した学内研究者との異分野融合研究に発展した事例も報告されている。なお、研修期間中であればSTEP6終了後でもSTEP5を実施することができる。

STEP6 海外での実践的教育・研究指導(海外研修)

最終試験としての海外研修(原則8週間以上)。これにより国際的に通用する研究教育スキルを身につけたかどうかを判定する。1期生は、2021年1月からSTEP6を開始した。COVID-19による海外渡航制限のため、やむを得ず一部オンライン上での講義・研修指導に変更したが、順調に研修を進めることができた。2021年12月には、ライフイベントによる延長を除く7名が、国際共著論文を完成してSTEP6を終了した。なお、2021年8月から2期生がSTEP6を開始し、2022年7月までに終了する予定である。

イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校における DEI戦略について

イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校と九州大学は、2014年5月に大学間交流協定を締結し、2019年8月26日にイリノイ大学にて行われた同協定更新の調印式を経て、現在国際パートナーシップに基づく親密な研究教育活動を進めている。

イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校が位置するイリノイ州は、全米でも多様な人種が多く集まる地域として知られており、黒人やヒスパニック系の住民の割合が約15%にも上る。そのため、同校は古くから人種や民族をめぐる人権問題に関する意識が高く、Office of the Vice Chancellor for Diversity, Equity & Inclusion を中心に、大学を挙げてダイバーシティ、エクイティ&インクルージョン(DEI) をめぐる問題に積極的に取り組んでいる。

いまなお日本人男性を中心としたきわめて均質性が高い日本社会において多様性の重要性について学ぶには、イリノイ大学のような多様性に富んだ海外のトップ大学の先駆的事例を学ぶことが効果的である。

こうした経緯から、今年度はイリノイ大学アーバナ・シャンペーン校の国際担当副学長 Reitumetse Obakeng Mabokela氏ならびに DEI担当副学長 Sean C. Garrick氏の2名に SENTAN-QのSTEP2講師を依頼した。一方、STEP3では、同校の教育学習イノベーションセンターの教育学習専門職の David Favre 氏に講師を依頼した。

以下は、イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校における DEIの取組について、Sean C. Garrick副学長に寄稿いただいた記事紹介である。

イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校

Sean C. Garrick 副学長(DEI担当)



イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校は、1867年に創立された米国を代表する研究機関の一つである。そして、ダイバーシティ、エクイティ&インクルージョン(DEI) は、本学の使命の中核を成すものである。本学では、人種や民族、ジェンダー、性的指向、社会経済的地位、言語、文化、国籍、宗教または信条、年齢、障がいに関わりなく、すべての学生に対する教育の機会均等を保障している。教職員や学生の多様性は、本学の生産性や創造性、そしてよりよい未来を創り出す能力に関わるものである。

イリノイ大学の行動指針では、次のとおり DEIの重要性を認めている：「イリノイ大学は、多様な学生や教職員、リーダーたちの計り知れない才能を開花させる特権と責任を有している。相互尊重と信頼、そして透明で公正な対応への期待によって定義される健全な関係の構築は、すべての構成員の連帯責任である；全ての人の参画をキャンパス・コミュニティのあらゆる場面で可能にするためには、誰もが傍観者であることはできない.....多様なバックグラウンドや視点、経験は、キャンパスにおける教室内外の会話を豊かにし、我々の創造性を刺激し、世界的問題に対する革新的な解決策を導き出す」

イリノイ大学の教育や職務経験を通じて公平性と包括性を基本的な価値観として定着させ、多様な現代社会で協働できる未来のリーダーを育成するには、専門分野を超えた「教員」による貢献が極めて重要であることを我々は理解している。

2020年秋、我々は「人種差別と社会的不正に対処するための理事長の呼びかけによる研究プログラム」を立ち上げた。このイニシアティブは、米国において正義、寛容、平等の障壁として存続する現実的かつ広範な問題に取り組む研究を、イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校として優先支援することを目指している。そして、200万ドルの年間予算を基に、我々は持続的かつ集中的な取組を実施し、教育機関として、地域コミュニティのパートナーとして、そして研究における国際的なリーダーとしての責任に裏打ちされた、目に見える成果を収めることができた。

このイニシアティブの初年度には、10のキャンパスユニットと17の部局からの提案に資金が提供された(図1参照)。ある調査によると、女性や有色人種の教員は、同僚や学生から多様性、公平性、インクルージョンに関する活動を求められるが、そうした仕事の殆どは正当に評価されず、報われないが、このプログラムでは、全採択者の82%は女性の教職員で、45%は有色人種の教職員であり、この傾向を逆転させる効果を持つことが示唆された(図2参照)。これらの学術的な活動や採択された提案は、それぞれ我々のコミュニティに即座に変化をもたらす可能性があり、我々の学術的な使命の中核を成すとともに、大学としてあるべき最高の姿を示すものである。

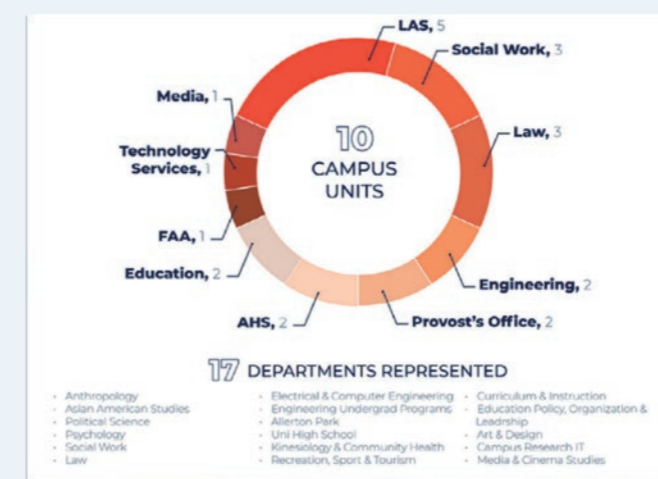


Fig.1
「人種差別と社会的不正に対処するための理事長の呼びかけによる研究プログラム」の支援対象となったキャンパスユニットと部局

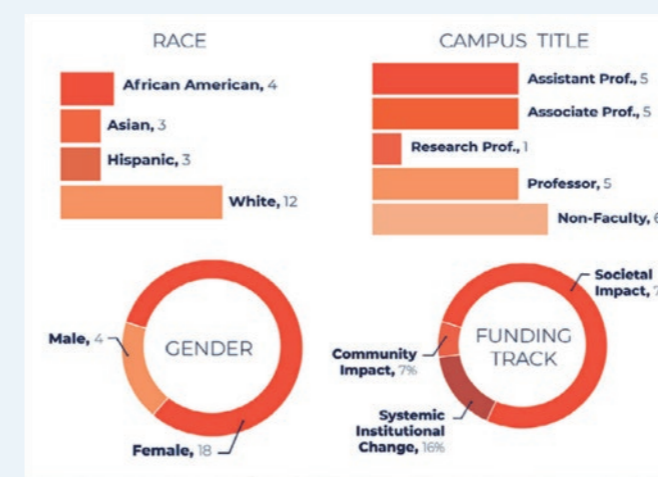


Fig.2
「人種差別と社会的不正に対処するための理事長の呼びかけによる研究プログラム」の助成対象者の分布

第1期研修生 修了認定式および修了報告会

2022年2月10日(木)、第1期生の修了認定式および修了報告会をオンラインで開催した。第1期生はSENTAN-Qが開始した令和元年度に選定され、2020年1月より女性8名、男性2名の計10名で2年間の研修をスタートしている。2021年12月には、ライフイベント等による延長者を除く7名が2年間の研修期間を経て無事にプログラムを修了した。以下では、第一部の修了認定式、第二部の修了報告会について報告する。

第一部の修了認定式では、初めに修了生への認定書の授与が行われた。石橋達朗総長から修了生7名の氏名と所属が順番に読み上げられ、顔写真と認定書がスライドで紹介された。また、修了生への祝辞と来賓への挨拶が述べられ、修了生はSENTAN-Qで習得した高度な研究・教育力やリーダーシップを発揮して、是非とも日本の学術分野の発展に貢献してほしいとの期待が述べられた。

続く来賓祝辞では、文部科学省人材政策課人材政策推進室長の三輪善英氏と、国立研究開発法人科学技術振興機構科学技術プログラム推進部プログラム主管の山村康子氏から、修了生への祝辞と期待の言葉が述べられた。

さらに、SENTAN-Qの海外プログラムモデル校としてSTEP2を担当した講師陣からビデオメッセージで祝辞が寄せられた。まず、カリフォルニア大学サンディエゴ校(以下、UCサンディエゴ)前副学長のSandra A. Brown氏からは、新型コロナウイルス感染症の世界的なパンデミックによる困難を抱えながらも修了生がすばらしい成果を収めたことや、海外パートナー校としてUCサンディエゴが本研修に協力できたことは大変光栄であるとのメッセージが述べられた。

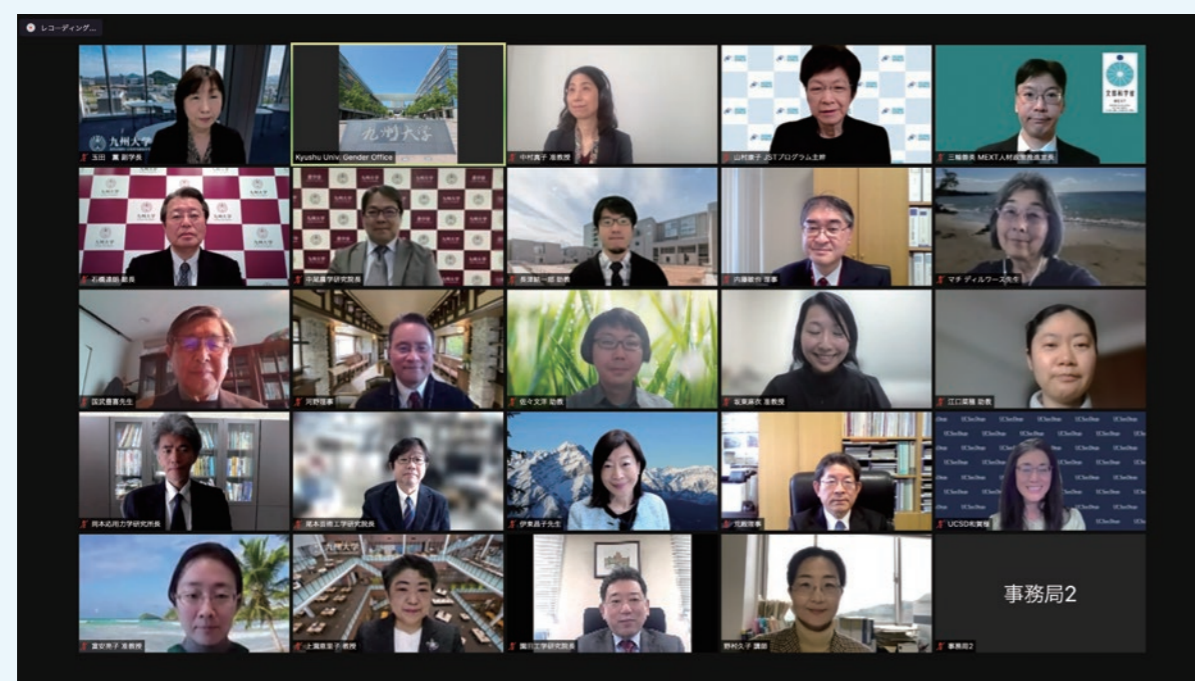
次にシンガポール国立大学前副学長のAndrew T.S.Wee氏からは、外国人留学生の指導はいまやグローバル社会において全ての研究者が経験しており、本研修で習得した知識や技術は、修了生が将来指導的地位に就いた際に直接役立つものであるとのメッセージが述べられた。最後に、アリゾナ大学教授のJean-Luc Bredas氏からは、困難な状況下で修了生が無事に研修を修了したことへの祝辞と今後の更なる活躍に向けた期待が述べられた。

来賓による祝辞の後は、修了生を代表して、農学研究院の中村真子准教授が謝辞を述べた。中村准教授は2年間の研修内容を振り返りながら、学内外の関係者のサポートなくして本研修を修了することはできなかったであろうと話した。また、本研修で習得した知識を学生や大学、社会へ広く還元するとともに、国際的な舞台で活躍していきたいとの意欲を述べた。その後、第一部の締めくくりとして関係者による写真撮影が行われ、認定式を終了した。

続く第二部では、修了生による修了報告会が行われた。修了生は、特にSTEP4、STEP5、STEP6を中心とした成果報告を英語で行ったのち、2年間の研修期間で学んだ知識や経験、今後のキャリアプランについて順番に説明した。修了生からは、国際的な共同研究のネットワークを構築できたことや、研究を継続して実施する粘り強さなどを身につけることができたとの感想が述べられた。また、コロナ禍という不確かな社会の中でどのように自分の希望を実現していけばいいのか、改めて考え直すきっかけになったとの言葉も寄せられた。

最後に、本研修のコーディネータである玉田薫副学長から閉会の挨拶が述べられた。玉田副学長は、困難な状況下で浮かんだアイデアの中にこそ未来を牽引する知見があるかもしれないと話しつつ、改めて学内外の関係者に向けた謝辞を述べられた。

(男女共同参画推進室 相良祥子)



第1期 研修生

No.1

坂東 麻衣 准教授

BANDO Mai



所属:工学研究院 航空宇宙工学部門

研究分野 宇宙機の軌道力学、アストロダイナミクス、制御工学

SENTAN-Q最終試験の海外研修では、コロラド大学のScheeres教授のメンターのもと探査機の軌道制御の研究を行う博士課程の学生とクープマン作用素という新たな枠組みによる軌道制御の理論的な研究を行いました。Scheeres教授の研究室の学生の研究テーマは幅広く、それぞれ独立した得意分野を明確に持っていることが印象的でした。アストロダイナミクスという共通のテーマを幹に、学生一人一人と個人の興味に応じて得意分野を深めていくことで、研究室全体の研究分野を多角的に拡げられ、学生個人の専門性が増すだけでなく、研究室全体としてのレベルがさらに向上します。また、学生の指導を通じた共同研究は、自分自身が行う共同研究とは全く異なる体験だと感じました。今回の海外研修はオンラインのみでの実施となったのは残念でしたが、今後も継続的に学生の派遣や受け入れなどをする予定です。今回得られた経験をもとに、今後も海外の研究者とのネットワークを拡げ、共同研究を積極的に行いたいと思います。

No.2

江口 菜穂 助教

EGUCHI Nawo



所属:応用力学研究所 (RIAM) 大気海洋環境研究センター

研究分野 大気科学、特に人工衛星リモートセンシング、気候変動科学

本研修の実施によって、COVID-19の状況下での国内外の研究者との共同研究を通じて、コミュニケーションの重要性を再認識すると同時に、世界、特に自分が属する研究業界に通用する知識と研究手法を多く学ぶことができ、根拠のある自信が身につきました。

また他分野の研修生との交流は、主にオンライン(slack)で行いましたが、まさにダイバーシティインクルージョンでした。個々は独立していますが、他者(特に分野による研究作法の違い)を認め、同じ目標に向かって前進している感覚が感じられたのがよかったです。

そしてSTEP 2と3で学んだダイバーシティやアクティブラーニングを研修期間中の授業や留学生指導に実践し、今後もその考えや手法を取り入れていきたいと思っています。さらに本研修を通じて学んだリーダーシップや国際的な共同作業、STEP5で得た知見(人工衛星工学、科学技術社会論等)を意識して、新規に立ち上げた人工衛星ミッションを形作っていきたくと思っています。

最後にSENTAN-Q事務局と各STEPで教授して下さった先生方、応用力学研究所の先生方に、このような貴重な機会を与えて頂き、感謝申し上げます。

No.3

※ライブイベントにより研修期間を延長中

益尾 知佐子 准教授

MASUO Chisako T.



所属:比較社会文化研究院 社会情報部門

研究分野 中国の対外政策、国際政治

私は学生時代、1年程度の留学は米中で3回行い、海外学振で米国に出たこともありましたが、学位はすべて日本で取ったので、研究成果は当初、日本語でのみ出していました。文系の研究者の世界では、通常それで教授が上がっていきます。しかし、自分としては「普通の研究者」のままでよいのかという悩みがありました。そこで過去6、7年は英語か中国語で開かれる会議にばかり出て、外国語でのアウトプットをどんどん増やしていました。

SENTAN-Qは理系の常識を念頭に置いて設計されているので、文系の研究者にはほぼ「ミッション・インポッシブル」です。ただし、部局の要求でそれに参加したことで、よい成果もありました。STEP6で英語での講義を1単位分受け持ったことで、自分の専門分野を系統的に講義する自信ができました。海外の大学院生との共著論文執筆では、相手の大学の事情を考慮しながら、自分の専門外の分野で論文をまとめるタフさが身につきました。また、とにかく外部の方に「お願い」しなければタスクがこなせないのが、英語と日本語での無数の交渉経験が積めました。すべての教員がこうした研修を受けるようになれば、九州大学のレベルが飛躍的に向上するのは間違いなしだと思います。

No.4

長津 結一郎 助教

NAGATSU Yuichiro



所属:芸術工学研究院 コミュニケーションデザイン科学部門

研究分野 アートマネジメント、芸術と社会包摂

この2年間は私にとって、英語への苦手意識を払拭し、新たなコミュニケーションに対して挑戦する気持ちを養う期間となりました。海外の大学での授業や、海外の研究者との共同研究の機会はすべて私にとって新しい挑戦でしたが、新型コロナウイルス感染症の影響で渡航ができなかった代わりに、当初渡航予定だったイギリスのみならず、東南アジアを中心とした世界各地に非常に多くのつながりを得ることができました。このつながりを足掛かりに今後も研究教育活動を国際的に展開していくことに挑戦していきたいと考えています。この不確かな時代に、それでも大切なことを推し進めるためにはどうしたらよいか。そのマインドセットと手法について学び取った2年間でした。SENTAN-Qの運営に携わってくださった先生方や事務職員のみならず、メンターを引き受けてくださった学内外の先生方、そして大学教員になってからできた「同期」のみならずにも感謝しています。このことをきっかけに部局間連携にも取り組んでいきたいと思っています。

第1期 研修生

No.5

中村 真子 准教授

NAKAMURA Mako



所属:農学研究院 附属国際農業教育・研究推進センター

研究分野 筋肉科学、発生生物学、細胞生物学

2019年度第1期生として学んだ2年間の研修が無事に修了しました。STEP2からSTEP6までの研修内容は非常に魅力的で、応募時に期待していたものが得られたと実感しています。

初講義となるSTEP2レクチャーはキックオフミーティングの直後で、非常に緊張していたことを覚えています。1年目にSTEP2からSTEP5までを完了し、2年目はSTEP6に集中して取り組みました。STEP6は実質1年間に満たない研修期間でメンター指導を受けながら海外の学生の教育をオンラインで行う挑戦的な内容でした。これに加え、海外の大学にて1単位分の講義を英語で行い海外学生から多くのフィードバックを得ることができました。STEP4, 6では交渉が必要な場面が何度もあり研鑽を積むことができました。今後は研修で学んだことを活用し教育研究活動を継続していきます。最後になりましたが、本事業の関係教職員の皆様に感謝いたします。ありがとうございました。

No.6

野村 久子 講師

NOMURA Hisako



所属:農学研究院 附属国際農業教育・研究推進センター

研究分野 農業経済、農業資源経済学、環境生命経済学

やればできる-“one person can make a difference”

一期生として選ばれたのが2020年1月。そこから、4月には英国のメンターも合流して博士課程の学生のフィールド調査の日程調整を組んでいました。またSENTAN-Qの研修期間中にサバティカルを活用して6月に渡航を考えていました。しかし、4月には緊急事態宣言で在宅勤務が始まり、フィールド調査も英国での海外研修もキャンセルとなってしまいました。それでも、博士課程の学生は4月に2週間の隔離期間を経て、ミャンマーでのフィールド調査を遂行し、私は講義の合間に、オンライン授業を受ける2人の子供たちに食事を作り、またその合間にオンラインの小テストを作成する毎日が続きました。しかし、コロナで研修変更を余儀なくされる中、ステップ2と3の講義提供が、対面とオンラインで開催されたのは、SENTAN-Q運営組織の迅速な対応のお陰であり、感謝いたします。特に2月12・13日にSTEP2研修のアリゾナ大学・ブレダス教授の大学ガバナンス、ダイバーシティ、インクルーシブ教育の紹介が具体的に刺激的でした。ブレダス教授が“one person can make a difference”の取組を組織の中で工夫された経験についてお伺いする貴重な機会であるとともに、アリゾナ大学のガバナンス、ダイバーシティ、インクルーシブ教育の取り組みについて理解が深まりました。また、海外研修なく、メンターの博士課程の学生と共著することは、課題はあったものの、工夫をすれば海外研究者と共著できると実感できました。この研修は、未来が見通せない中で、その都度計画を修正しながら、やればできることを体験する良い機会となりました。今後の研究生生活の糧として、生かしていきたいと思っています。

No.7

佐々 文洋 助教

SASSA Fumihiro



所属:システム情報科学研究院 情報エレクトロニクス部門

研究分野 MEMS、マイクロフレイティックデバイス、センサーロボット、バイオセンサー、化学センサー

2年間のSENTAN-Q研修全般を通して、教育・共同研究に関し多くの学びと成果を得ることができました。特に海外著名研究者との共同研究とトレーニングでは、それぞれ九大と先方の博士課程学生の指導を、当該研究者をメンターとして共同して行いました。この過程では様々な困難があり、特にコロナ禍での双方の研究環境の制限および遠隔コミュニケーションが課題でした。しかし指導学生の情熱とメンターの助力を得て、このような状況下でも成果を出すスキルを学ぶことができました。異なる立場・観点(自/他研究室など)から大学院生を指導する機会を得て、2年という短期間でありながら大学教員としての研究者教育スキル・実績そして自信を得ました。ここで、プログラム初期に座学で学んだ組織ガバナンス、インクルーシブの知識、そしてアクティブラーニングの知識は、続く海外共同研究での学生指導の大きな助けになり、また現在も自研究室の学生指導にも大いに参考になっています。そして、これらの過程で得た成果と国際性も含め評価され、令和3年度には文部科学大臣賞若手科学者賞を受賞することができました。今後、このSENTAN-Q研修で得たスキルを活かし国際的な研究・教育活動を行っていきたいと思います。

No.8

富安 亮子 准教授

OISHI-TOMIYASU Ryoko



所属:マス・フォア・インダストリ研究所

数理計算インテリジェント社会実装推進部門

研究分野 代数学の応用、数論、数理結晶学

オンラインでない状況の偉大さを心から実感した!というほどオンラインの研究指導はさすがに難しかったです。教育経験が年齢ほどない自分には学生教育に関する研修はとても有意義だったと思います。滞在中はメンター・学生とともに、集中してプロジェクトを進められました。数学から見て他分野の高エネ研に勤務していたころから、私は数学専門家にとって手ごろな難易度の未解決問題を他分野で見つけてきては数学の問題として解決するという研究をよく行うのですが、1年目も2年目もその方向に沿い、別テーマでかつ私がやりたかったことであるという贅沢な状況だったと思います。研修に協力してくれた梶原研のセバスチャン・Graiff Zuritaとメンター研究室のラマヌジャム・Kamaraj、一学期間の講義の手配に始まり色々手伝ってくれたメンターProf. Ben KaneとTAのDr. スリマティ・Varadharajan を含め勤務中にお世話になった香港大の皆様、リカレント教育でご協力いただいたQREC・佐竹研の皆様、パンデミックにも関わらず2021年後半の滞在のため多大なご協力を頂いたIMI・数理学府の皆様と私の家族に感謝します。

第1期 研修生

No.9 ※ライフイベントにより研修期間を延長中

若林 里衣 助教

WAKABAYASHI Ric



所属:工学研究院 応用化学部門

研究分野 超分子化学

まずは、修了された一期生の皆さま、大変おめでとうございます。皆さまの今後ますますのご活躍を祈念しております。

私自身はライフイベントによる期間延長により、まだ研修半ばですが、これまでの研修で、通常の研究生活では体験できない様々なことを学ぶことができていると感じています。特にSTEP4で海外の研究者をメンターとして留学生指導を行う中では、広い視点で研究テーマを進めるということだけでなく、学生をエンカレッジする言葉のかけ方、意見の引き出し方等、今後研究者、教育者として進むにあたり大事な姿勢を学びました。メンターを引き受けてくださった先生、このような機会を与えてくださったSENTAN-Qに感謝しています。また、リカレント教育では、これまで興味がありつつも手を出せずにいたデータサイエンスの勉強を始めることができました。今後自身の研究に活かして参りたいと考えています。まだまだ皆さんの研修が待ち受けておりますが、いずれも私自身の成長に大いに役立つものばかりですので、完遂できるよう努めて参りたいと思います。

No.10 ※ライフイベントにより研修期間を延長中

山内 由紀子 准教授

YAMAUCHI Yukiko



所属:システム情報科学研究院 情報学部門

研究分野 分散アルゴリズム、数理情報学

産前産後休業、育児休業を取得していたため、研修期間を7ヶ月間延長していただきました。当初の予定とは研修の実施時期が変わってしまったため、海外研究機関での教育・研究指導については日程や学生獲得などから仕切り直しとなってしまいましたが、フランスのソルボンヌ大学で2021年11月から英語による学生指導を開始し、2021年12月から2022年1月に「自律モバイルロボット群の分散協調」という専門科目の英語講義を行いました。どちらもオンライン実施となってしまったため、難しさも多々ありましたが、講義では受講生とインタラクションをとるために講義の構成、資料の内容にアクティブラーニングの技術を取り入れるなど、新しいことにも取り組んでいます。休業からの復帰後すぐに取組みやすかった点ではオンライン実施もよかったと思っています。休業前から取り組んでいた留学生への研究指導で得られた成果は、今まで挑戦してこなかった分野のAROB-ISBC-SWARM2022という国際会議に採択され、1月末にオンラインでの口頭発表を行いました。SENTAN-Qプログラムによって新しい挑戦の機会をいただき感謝しています。

第2期 研修生

No.1

アルブレヒト 建 准教授

ALBRECHT Ken



所属:先導物質化学研究所 融合材料部門

研究分野 高分子化学、有機半導体、錯体化学、超分子化学、材料化学

研修を通じてこれまで私は大学ガバナンスなど、日本の大学では学ぶ機会があまり多くない事柄について学んできました。SENTAN-Qは綿密に構成されたプログラムで、教育指導スキルの向上に役立つ研修もあります。こうした研修は研究者としての将来のキャリアにプラスになることは間違いありません。また、SENTAN-Qプログラムを通じて国際的なネットワークを構築し、共同研究などを展開する好機となると思っています。現在実施している海外メンターとの共同研究と学生指導は大きな経験となっています。

私のルーツはヨーロッパにあるため、将来は日本や他のアジア諸国とヨーロッパとの架け橋になりたいと考えています。また世界トップクラスの科学者となって、国際的に研究を展開したいと思っています。

No.2

古田 美智子 講師

FURUTA Michiko



所属:歯学研究院 口腔保健推進学講座

研究分野 予防歯科学

私は、歯科疾患の疫学研究に携わり、集団内における口腔の健康状態とそれに関連する要因を調べ、歯科疾患の新たな予防方法を確立するために研究しています。その方法を開発するためには幅広い視野で且つ国際的な視点を持って研究を進める必要があります。SENTAN-Qを通じ、多種多様な分野の新しい知識を取り入れ、新たな発想で研究を進めていながら、研究・教育指導スキルを向上させたいと思っています。現在、研修途中ではありますが、研修を通して、海外の研究者とのネットワークが広がり、自身の研究が発展したと実感しています。

大学や社会が発展するためにはダイバーシティ・インクルーシブが重要であると思われます。多様な背景や価値観を持つ人たちが協力することで、新たな発想や考え方が生まれ、現在直面している問題を独創的に解決することができます。今後、ダイバーシティ・インクルーシブな環境づくりに努めていきたいと考えています。

第2期 研修生

No.3

冬野 美晴 助教

FUYUNO Miharu

所属: 芸術工学研究院 コンテンツ・クリエイティブデザイン部門

研究分野

メディアと教育、メディアと言語文化、認知言語学、コーパス言語学、英語教育学



過去数年間に渡り、留学生を含むさまざまな学生達に講義と研究指導を行ってきました。文化背景の異なる学生達を指導する中で、ダイバーシティを理解する重要性を意識するようになりました。SENTAN-Qプログラムはダイバーシティへの理解を深めるすばらしい機会だと考え応募しました。

現在、第2期研修生としてプログラムに参加しています。研修には多数の実践的な活動が含まれており、個別指導も充実しています。今後の研究指導や講義に役立つスキルを身に付ける上で有益であると早くも感じています。また、STEP2の講義は視野を広げてくれ、海外の大学の先進的な取り組みについて学ぶことができました。SENTAN-Qで学んだことは私のキャリアの財産になると確信しています。

No.4

前川 裕美 講師

MAEKAWA Hiromi

所属: 農学研究院 附属国際農業教育・研究推進センター

研究分野

分子細胞生物学



SENTAN-Qプログラムに参加した理由は、その内容のユニークさにあります。このプログラムを通じて、大学ガバナンス、多様な研究環境、英語での効果的な教授法など、大学のさまざまな側面について学ぶことができます。異なる研究背景を持つ他の研究者との交流から刺激を受けられる有益な機会であると思います。また、海外の研究者との共同研究を始めるきっかけになりました。

SENTAN-Qプログラムを通じて学んだこと活用して、研究を広げることとダイバーシティ・インクルージョンを高めるように活動していきたいと考えています。

No.5

丸山 明子 准教授

MARUYAMA-NAKASHITA Akiko

所属: 農学研究院 生命機能科学部門

研究分野

植物栄養学、植物分子生物学、植物生理学



私は海外の大学で研究を行った経験がなく、SENTAN-Qプログラムは世界トップクラスの指導者の指導を受けながら、国際的な研究・教育指導スキルを磨く実践的な機会になると考えました。また九州大学の発展に不可欠な大学ガバナンス、ダイバーシティ、インクルージョンについて、さらに知識を広げることができます。

SENTAN-Qプログラムを通じて、専門分野でこれまで以上に積極的に活動し、若手に刺激を与え、世界トップクラスの研究を主導したいと思います。

No.6

太田 真理 講師

OHTA Shinri

所属: 人文科学研究院 文学部門

研究分野

認知神経科学、心理言語学、言語脳科学



SENTAN-Qプログラムを通じて、多様な学問的・文化的・社会経済的バックグラウンドを持つ学生に対して、より良い教育・研究の機会を提供できるようになることを目指しています。私の専門とする言語脳科学を含め、学際的な研究の推進には、多様なバックグラウンドを持つ学生を受け入れ、研究室のダイバーシティ、公平性、インクルージョンを高めることが、非常に重要であると信じています。しかし、それぞれの学生の教育上のニーズを理解し、適切な研究・教育の機会を提供することは、私にとって大きな課題でした。

このプログラムを通じて、より効果的で実践的な教授法についての学びを深めることができました。今後もダイバーシティやインクルージョンについての理解をさらに深め、研究・教育活動の質を大きく向上させていきたいと思っています。

第2期 研修生

No.7

佐藤 可織 助教

SATO Kaori



所属:応用力学研究所 地球環境力学部門

研究分野 大気物理、衛星リモートセンシング

SENTAN-Qプログラムは各分野、組織のトップレベルの専門家や指導者と接する機会があり、とても実践的でユニークな研修です。本研修を通じて、海外の大学での講義や、海外研究教育機関に所属する学生の研究指導を行うことができ、大変充実した時間を過ごさせていただいています。

気候変動の研究は様々な分野の課題と複雑に関連しており、課題解決に必要な国際共同衛星プロジェクトの実現に本研修を活かしていきたいと考えております。

No.8

田中 学 准教授

TANAKA Manabu



所属:工学研究院 化学工学部門

研究分野 化学工学、応用物理、プラズマ化学、プラズマ計測

私の研究目的は、1万度以上を有する電磁性熱流体である熱プラズマの基礎現象の解明です。1万度の基礎現象の理解に基づき、機能性材料の創成、環境浄化システム分野における熱プラズマの活用および大量処理システムの確立を実現します。

SENTAN-Qプログラムを通じて国際的な研究・教育指導スキルを磨くとともに、大学のガバナンスとマネジメントについて理解を深めることに意義があると考えています。研究分野に関しては、環境問題などの多くの国際問題の解決に熱プラズマが有効であると確信しているため、将来的にはSENTAN-Qを通じて確立したネットワークを駆使し、九州大学を中心とした国際プラズマ研究所の設立を目指します。

No.9

トマ ディエゴ 助教

THOMAS Diego



所属:システム情報科学研究院 情報知能工学部門

研究分野 情報科学、3D理論

SENTAN-Qは他の多様な研究分野の教員とつながり、視野を広げる素晴らしい機会であると思います。自分たちの研究を別の視点から考察することで、新しい革新的なアイデアを得ることができると思います。またアクティブラーニング型教授法を講義に取り入れることで、若い学生の関心を高めることができます。

将来の目標は、3次元ビジョン分野の世界的リーダーになることです。とりわけ、最先端技術につながる新しい革新的なアイデアを、コンピュータービジョンとコンピューターグラフィックスの分野に導入したいと考えています。日本で暮らすフランス人研究者として、フランスの研究者をはじめ、世界中の研究者とぜひとも新たに交流を持ちたいと思っています。

No.10

東藤 大樹 准教授

TODO Taiki



所属:システム情報科学研究院 情報学部門

研究分野 計算機科学・経済学

私は計算機科学と経済学にまたがる分野横断的研究を専門にしています。様々なバックグラウンドを持つ研究者が活躍しており、最新の研究の理解には多角的な視点が要求されるため、本研修のSTEP5でのリカレント教育の受講は大変有意義であったと感じました。

COVID-19の影響により海外研修の現地実施は困難にはなりましたが、STEP4やSTEP6のための本学・海外研究機関との調整の経験は、今後上位職に就いた際の糧となることと思います。

第3期 研修生

No.1

池谷 直樹 准教授

IKEGAYA Naoki



所属:総合理工学研究院 環境理工学部門

研究分野 都市境界層、都市大気間物質輸送、都市空間環境

高い同質性のもと経済発展を遂げるという単一目標を掲げ発展してきた近代日本では、多様性を重んじ相乗効果により組織成果を向上させるという考えは十分浸透していないように思います。本プログラムは、ダイバーシティ・インクルーシブの重要性を学ぶ大変貴重な機会となっており、今後の自身のキャリアの中で、多様性のもと組織成果を上げるという考え方を定着させる転換点になると考えています。また、本プログラムは、アクティブラーニング型教授法に関する講義や国内外での留学生指導などを通じて、これまでの教育方法や研究手法を見直す貴重な機会にもなっています。昨今の大学院生や若い世代の研究者の研究活動では、否応なしに国際化と迅速さが要求される傾向にあると思いますが、筆頭著者として国際ジャーナルに研究成果を発表できるほど研究力が向上する学生を数多く見してきました。こうした優秀な学生の発想や知識が教員の能力で制限されないよう、本プログラムを活用して自身の研究力と教育力を向上させるきっかけにしたいと考えています。

No.2

猪石 篤 助教

INOISHI Atsushi



所属:先導物質化学研究所 先端素子材料部門

研究分野 エネルギー材料、固体電気化学

SENTAN-Qは、大学ガバナンス、ダイバーシティ、アクティブラーニングに関する講義とともにリカレント教育と英語を使った実践的な教育・研究指導が設定されており、世界トップレベルの教育者・研究者になるための素晴らしい機会と感じ、応募しました。世界トップ大学講師から指導を受けられる機会は非常に貴重で有益であると感じています。これまで私が行ってきた講義は一方向になってしまうことが多かったのですが、アクティブラーニング型教授法を学び、非常にたくさんの方法があるとともに、自分自身も学ぶことができることが分かりました。今後、本研修内で海外での講義を行います。その際に使っていきたいと思っています。

私は電池材料の開発を専門に行っており、普段は化学系分野の教員と接する機会が多いですが、本研修では学内の様々な分野の教員が参加しており、異分野での交流を持つことも非常に有益な機会であると感じます。また、本研修をきっかけに世界トップレベル研究者との国際共同研究を積極的に推進したいと考えています。

No.3

金子 直樹 助教

KANEKO Naoki



所属:歯学研究院 口腔顎顔面病態学講座

研究分野 免疫学

私は、これまでに多くの素晴らしいメンターに出会うことができました。彼らは多様なバックグラウンドを持つ学生に対して、各々のニーズを理解し、緻密にかつ情熱的に教育を行っていました。そして、彼ら自身が教育を通して学生の成長を楽しんでいることが私にも伝わってきました。SENTAN-Qプログラムに応募させていただいた理由は、私自身も学生達にとってそのようなメンター・教育者になりたいという思いからです。

SENTAN-Qプログラムでは、ダイバーシティ・スーパーグローバル教員に向けて、大学ガバナンスやアクティブラーニングメソッド、インクルージョンなど多様な研修に参加でき、自身の視野の広がりを実感しています。今後このプログラムを通して、教育者としてのスキルを磨き、世界に通用するグローバルな学生の教育に従事したいと考えています。

No.4

草場 彰 助教

KUSABA Akira



所属:応用力学研究所 新エネルギー力学部門

研究分野 結晶成長

SENTAN-Qは、若手教員にも国際水準の大学ガバナンスと教授法について学ぶ機会を与える、ジェネレーションバランスに配慮された研修プログラムです。PIへのステップアップのために、研修を通して必要なスキルを習得したいと考え、このプログラムに応募しました。私は助教ですので、これまで授業を担当することはありませんでしたが、アクティブラーニング型教授法について英語での実践的訓練を積めたことは自信につながりました。留学生・海外学生の研究指導については、研究責任者としてテーマの立案から論文執筆の指導まで、精一杯に取り組んで参ります。

私は材料プロセス設計にAIを活用する研究を進めており、今後は、機械・化学・応用物理・情報と、さまざまなバックボーンをもつ学生を受け入れて研究室運営を行っていきます。そこでは、研修を通して得たダイバーシティ・インクルージョンの理解と海外研究者とのネットワークを活かしていきたいと思っています。

第3期 研修生

No.5

LIU Huixin 准教授 | LIU Huixin

所属:理学研究院 地球惑星科学部門

研究分野 宇宙物理、宇宙天気、気象・超高層大気結合



SENTAN-QのSTEP2およびSTEP5は、研究者の能力を多方面に伸ばすことができる非常にユニークなものだと思います。研修を通じて、自分の研究だけでなく、より広範な視点から大学における研究や教育を捉えることができるようになり、教員としての責任感も養われます。たとえば、STEP5のリカレント教育では、専門分野が異なる研究者とのコネクションを築くことができました。将来的にはこれを学際研究まで発展させることができればと思います。また、STEP2のダイバーシティ・インクルージョン研修で学んだ知識を活かして、大学のDEI環境の改善に貢献していきたいと思っています。そして、誰もが安心して仕事や勉強に取り組むことができるような環境づくりに取り組みたいと思います。

研究者としては、いつか宇宙天気予報の精度を気象予報と同じレベルまで向上させ、有人宇宙探査に貢献することが夢です。大学教員としては、ここ九州大学を多くの外国人研究者や留学生にとって魅力ある場所とすべく、大学の国際化に貢献していきたいと思っています。

No.6

森本 有紀 助教 | MORIMOTO Yuki

所属:芸術工学研究院 コンテンツ・クリエイティブデザイン部門

研究分野 コンピュータグラフィックス



コンピュータグラフィックスの研究分野はいくつもの分野が関わる高度で応用的な研究分野です。SENTAN-Qでは他分野の教員とのつながりや、教育やマネジメントの点でも多様な視点が得られるように設計されており、非常に興味深い内容となっています。海外での教育や研究の研修もあり、楽しみにしています。

将来的な目標としては、近年、ますますデジタル化、オンライン化が進む中、コンピュータグラフィックスやその周辺技術でよりよい社会を実現していきたいと思っています。これからの大学の在り方や人間の生き方についても、時代に合ったものを目指して柔軟に思考し、活動していければと思っています。

No.7

中林 康治 助教 | NAKABAYASHI Koji

所属:先導物質化学研究所 先端素子材料部門

研究分野 炭素材料、石油化学、カーボンニュートラル



私は、昨今における脱炭素社会、カーボンリサイクル社会の到来に向けて炭素を如何に社会へ循環させるか、日々思いを巡らしております。このような研究を発展させるためには、これまでの固定概念では通用せず、より多様性の溢れた思想や意見が必要となります。

SENTAN-Qは、海外研修を実施することで、国際的な感覚を磨かせるのみならず、より視点の広い国際的なガバナンス・ダイバーシティ・インクルーシブ教育を受けることができます。それはまさに、世界と伍して戦える様な人材を輩出することを目的としたプログラムであり、是非とも私もその一員になりたいと強く感じて本プログラムへの参加を志願いたしました。更に、本プログラムでは、Progress100以内の優秀な学生と触れ合うことができます。

本プログラムを通じて、現代社会における世界トップクラスの大学に通う学生が何を考え、何をしたいのか、共に学び、共にゴールに向かって互いに切磋琢磨できればと考えております。そして将来的には、本プログラムで学んだことを活かし国際的に活躍できる研究者になりたいと考えております。

No.8

末松 昂一 助教 | SUEMATSU Koichi

所属:総合理工学研究院 物質科学部門

研究分野 機能性無機材料、電気化学、ガスセンシング



私は学生時代にドイツの研究室に留学した経験があり、その研究室では様々な国籍や文化、学術的バックグラウンドを持った学生・研究者が切磋琢磨し、楽しみながら研究全体を推し進める環境でした。今となってはこれが多様性や包摂性の高い研究環境であったと感じ、研究者として憧れであり目標とする研究室の1つです。私自身も将来、参画するメンバーがやりがいを感じ、最大限に能力を発揮できるような研究室を実現したいと考えております。SENTAN-Qプログラムでは、このような研究環境構築に必要な多様性の理解やリカレント教育、研究教育手法等を学ぶことができると思い応募しました。

私は機能性ナノ材料を利用したガスセンシングデバイスの研究を専門としております。私の研究分野では基礎的な材料研究から回路設計や電子デバイス設計等、社会実装に向けて多様な分野との融合が必要不可欠となります。そこでSENTAN-Qを通じて国際的ネットワークを構築し、将来的には九州大学を中心とした産学官連携国際研究・教育コミュニティを構築したいと考えております。

第3期 研修生

No.9

アデルマ スリアジャヤ 助教 | Ade Irma Suriajaya

所属:数理学研究院 数学部門

研究分野 数学(解析的整数論)



私は内部推薦で初めてSENTAN-Qプログラムについて知り、とても魅力的な内容でぜひ挑戦してみたく思いました。3期生のプログラムは現在約半年間進行し、大学管理と授業方法に関する研修であるSTEP2、STEP3が終了し、STEP4の学生指導を実施中です。残りのSTEP5リカレント教育及びSTEP6の海外での学生指導を含む最終試験に向けた準備もある程度整い、プログラムの半分ほどが実施されたところです。今になってプログラムの意義と効果を実に感じられ、参加して本当によかったと自信を持って言えるようになりました。

助教として3年目の私は大学管理については当然全く経験がなく、授業に関しても、未だ主な大学講義を担当したことがありません。そのため、私のような若手教員(ジュニアファカルティ)にとって、SENTAN-Qは大学管理の知識を少しでも事前に得られる大変貴重な機会でした。また、STEP3で教えていただいた授業方法はアクティブラーニングを用いる授業であり、私が活躍している数学分野ではまだ十分に適用されていないため、今後の授業実施方法にとっても参考になりました。さらに、STEP5リカレント教育のプログラムでは、自分と全く違う分野の授業を一对一のアクティブラーニング形式で受けることができ、学ぶ意欲が旺盛な研究者としてはとても楽しい機会でした。最後に、STEP4やSTEP6での学生指導は、まだそうした経験のない助教の立場では非常に貴重な経験だと思えます。

No.10

津田 みどり 准教授 | TUDA Midori

所属:農学研究院 資源生物科学部門

研究分野 群集生態学、個体群生態学、進化生態学、分子生態学、生物的防除学



SENTAN-Qは、研究、教育、大学ガバナンスについての私の視野を広げる絶好のチャンスになると直感し、応募しました。また、採用された暁には、アカデミアにおいてダイバーシティを高めるきっかけをつくれるとも思いました。SENTAN-Qの研修は、インタラクティブでインスパイアされます。これまでの研修では、他の研修生とともに、日米間の大学ガバナンスやダイバーシティ・インクルージョンの相違点や、インタラクティブな教育方法を学び、これを適用して英語によるオンライン模擬講義を実践しました。講師陣や研修生は、性別、年齢、人種において多様であり皆熱心で、このような機会を得たことを大変幸運に思います。今後、研修で学んだ知識、考え、手法を教育や研究で活かし、これまで以上に広範な研究者や学生と効果的に共同研究・指導できるという自信が芽生えました。将来は、私の現在の専門である生態学と生物的防除学を基礎に、AIやナノ技術を取り入れた新しい研究分野を発展させたいと考えています。

No.11

吉岡 宏晃 助教 | YOSHIOKA Hiroaki

所属:システム情報科学研究院 情報エレクトロニクス部門

研究分野 レーザー工学



私は、革新的なレーザー光源の創出を研究の軸に、印刷可能なマイクロレーザーの研究を進めています。これは次世代の集積量子デバイス、光集積回路、超高感度バイオセンシングなど先進的な応用で役に立ちます。SENTAN-Qプログラムを通して、これら国際競争力の必要な応用分野でのプレゼンスを高めていく機会にしたいと思っています。

数年前、長期海外派遣で国際共同研究を推進しましたが、実験系ゆえの研究環境構築や実験に費やす高い時間的コストにより、“国際的な研究・教育指導スキル向上”という観点をもった活動が十分にできませんでした。そのため新しい知識を身に着け“国際的な研究・教育指導スキル向上”を達成するためにSENTAN-Qへ応募しました。

令和4年(2022年)度の予定

2022年度、2期生はSTEP6の海外での実践的教育・研究指導を終了する予定である。研修生の海外渡航が難しい場合は、Web上での実施を認める。3期生は、引き続きSTEP4の留学生指導やSTEP5のリカレント教育を実施し、研修開始1年となる8月をめどにSTEP4を終了し、STEP6へ進む予定である。4期生は、2022年3月から募集を開始し、STEP1研修生選出を経て、8月の研修開始を目指す。

| 2期生 | 3期生 | 4期生(予定) |
|--|---|---|
| <p>STEP5 リカレント教育 STEP6 終了後でも可</p> <p>STEP6 令和3年8月から開始 8週間以上 海外研修 (実施困難な場合は オンラインを活用)</p> | <p>STEP4 令和3年8月から1年間 留学生指導</p> <p>STEP5 令和3年8月から リカレント教育 STEP6 終了後でも可</p> <p>STEP6 令和4年8月以降開始 8週間以上 海外研修</p> | <p>3~5月 推薦受付 6月 STEP1 書面審査 7月 STEP1 面接審査 7月上旬 研修生選定</p> <p>2年間の研修開始</p> <p>8~3月 STEP2 実施予定 9~3月 STEP3 実施予定 8月 STEP4 開始 8月 STEP5 開始</p> |

SENTAN-Qの波及効果

世界と伍して戦える強い九州大学の実現を目指してSENTAN-Qを事業期間の6年間実施することにより、以下の波及効果が期待できる。

- 「採用=>育成=>活躍=>昇格のエコシステム」の構築による女性および若手教員の「質」保証と「数」の増加の両立
- 多様性を受け入れる組織の構築、上位職登用後に女性・若手が活躍しやすい環境の構築(無意識のバイアスの排除)
- AI, IoTなど先端分野との学際研究の活性化による産学連携や起業などの促進(研究アイデア投資価値の向上)
- 女性・若手研究者の研究業績の追跡調査:研修の効果の数値データの公表(モデル事業としての波及効果)
- 留学生や外国人教員の増加、国際レピュテーションの向上
- 女性の活躍可視化による女子学生の増加

8

附 録 (資料集)



科学技術人材育成費補助事業『ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（先端型）』
「ダイバーシティ・スーパーグローバル教員育成研修（SENTAN-Q）」

応募要領

<令和4年度募集分>

I. 目的

「ダイバーシティ・スーパーグローバル教員育成研修（SENTAN-Q）」は、世界トップレベルの研究教育力を実践的に身につけることで、女性及び若手教員の上位職並びに管理職への登用を大幅に加速させ、真にグローバルな研究大学として国際社会に認められる研究教育環境を整えることを目的とする。

II. 研修期間

2年間

III. 対象者

次のいずれかに該当する女性又は研修初年度における年度末年齢が37歳以下の男性の准教授、講師及び助教とする。

- (1) 部局ポイントで雇用されている者
- (2) 期間を定めて雇用されている者のうち、テニユア審査が予定されている者

IV. 研修生の選出

1. 部局等からの推薦

各部局の長は、部局における審査により選定した者（研究実績があり、研修修了後1年以内に上位職への昇任又はテニユア付与が見込まれる者）を候補者として選出し、様式1～4を総長あてに提出する。

※【様式1～4】参照

2. 全学審査等

総長の下に設置するダイバーシティ・スーパーグローバル教員育成研修審査会（以下「審査会」という。）にて受講候補者を選出する。各年度の研修生は、原則男女比を1：1とした5～10名を選出し、文理融合クラス編成とする。

審査会では、これまでの研究業績等を踏まえ、本事業の目的に沿った研修生を書面並びにヒアリング審査により部局推薦の候補者の中から選出する。

3. スケジュール

| | |
|-----------|-----------------|
| 募集の開始 | 令和4年3月7日（月） |
| 応募の締切 | 令和4年5月16日（月） |
| 全学の審査結果通知 | 令和4年7月上旬（予定） |
| 研修開始 | 令和4年8月1日（月）（予定） |

V. 研修概要

※ 別紙「研修概要」参照

VI. 本事業修了後の上位職昇任等について

本事業は、女性及び若手教員の上位職並びに管理職への登用を大幅に加速させることを目的とし、国立大学経営改革促進事業「九州大学ルネッサンスプロジェクト」の一環として取り組む研修事業である。

本学の教員人事は原則国際公募にて行うが、女性及び若手教員の活躍をもって世界と伍して戦える強い本学の実現を目指すために、本事業の研修を受講することで、国際公募を行わずに教員の内部昇任等を行う。

1. 上位職昇任に伴う支援

本研修において認定書を交付された受講者を原則1年以内にテニユア付与又は上位職への昇任を実施する。研修修了後の教員の昇任に当たっては、部局等の長の申請により、昇任に伴う差額分のポイントを支援する。

2. 支援期間

- ①女性教員：昇任日から起算して3年の範囲内
 - ②男性の若手教員：昇任日から起算して2年の範囲内
（ただし、②については昇任時における年度末年齢が40歳未満の者に限る。）
- 支援終了後の昇任ポイントは、部局ポイントにより対応する。

様式 1

受付番号 _____

九州大学ダイバーシティ・スーパーグローバル教員育成研修
(SENTAN-Q) 推薦書

候補者情報

※部局長作成書類

| | | | | | |
|------------------------|------------------------------|--------|------------|----|--|
| (ローマ字) (カタカナ) 氏名 | () () | 性別 | 1.男 2.女 | 国籍 | |
| 生年月日 | 西暦 年 月 日 生 (2023年3月末現在 歳) | E-mail | | | |
| 現職 | 所属部局・部門等名 | 職名 | | | |

推薦部局推薦者

| | |
|-------------------|--------------|
| 推薦部局名 | 部局長名 |
| 本推薦書に関する連絡担当者・連絡先 | |
| 部局名: | 部署: |
| 氏名: | |
| TEL: | FAX: E-mail: |

※以下、本ページ含め3ページ以内に収まるよう適宜調整して記載する。

部局での審議経緯 (部局で審議した教授会・委員会等について時系列で記載して下さい。なお、部局内に他の希望者がいた場合にはその人数及び候補者に絞られた経過がわかるように記載して下さい)

| |
|--|
| |
|--|

推薦可能とする根拠 (部局の人事ポイント状況、退職予定教員の状況等、全学支援終了後の必要ポイントを部局で確保可能と判断する根拠について記載して下さい)

| |
|--|
| |
|--|

- 1 -

候補者の推薦理由

| |
|---|
| 研修で合格認定された場合、部局での昇任あるいはテニュア化が可能であると判断する理由 |
| |
| ダイバーシティ・スーパーグローバル(SENTAN-Q)研修を受けるにふさわしい教員であると判断する理由 |
| |

部局としての候補者の育成方針 (候補者が SENTAN-Q 研修生として世界トップレベルの教育研究を実践的に身につけていくに当たり、部局としての育成の方針や教育研究環境の配慮事項などがあれば記載して下さい)

| |
|--|
| |
|--|

【候補者氏名 _____】

- 2 -

様式2

業績調書

※候補者作成書類

| | | | | | |
|------------------------|---|--------|------------|----|--|
| (ローマ字) (カタカナ) 氏名 | () () | 性別 | 1.男 2.女 | 国籍 | |
| 生年月日 | 西暦 年 月 日生 (2023年3月末現在 歳) | E-mail | | | |
| 現職 | 所属部局・部門等名 | 職名 | | | |
| 略歴 (年は西暦で記載) | 1. 年 月 ~ 年 月 大学 学部卒 2. 年 月 ~ 年 月 大学大学院 研究科修士課程修了 3. 年 月 ~ 年 月 大学大学院 研究科博士課程修了 4. 年 月 博士 () の学位取得 () 大学 5. 年 月 ~ 年 月 6. 年 月 ~ 年 月 7. 年 月 ~ 年 月 8. 年 月 ~ 年 月 9. 年 月 ~ 年 月 10. 年 月 ~ 年 月 (現在に至る) | | | | |
| 海外での教育・研究経歴 | 1. 年 月 ~ 年 月 2. 年 月 ~ 年 月 3. 年 月 ~ 年 月 | | | | |
| 研究テーマ | (和文) | | | | |
| | (英文) | | | | |

推薦理由書

様式3に従って、候補者がダイバーシティ・スーパーグローバル(SENTAN-Q)研修を受けるにふさわしい業績を有する人物であることを示す推薦理由書2通を提出ください。

※ 推薦理由書作成者は、候補者の研究をよく理解している研究者とし、少なくとも1通は候補者の所属機関以外の研究者とする(海外研究者であればなお良い)。推薦者又は候補者と同一人物であってはなりません。推薦理由書作成者が海外研究者の場合は自由書式でも構いませんが、記載内容は共通のものとしてください。

| | | |
|---|-------|----|
| A | 所属機関名 | 氏名 |
| B | 所属機関名 | 氏名 |

I 【研究の概要】 ※2頁以内に収めること

II 【研究業績】を適宜引用(図表等を含めてもよい)しながら、これまでの研究の概要を、研究の背景と目的、研究の方法と主な成果、当該分野における研究業績の独創性とインパクトを含め、具体的に記載してください。とくに、グループによる研究の場合は、候補者が主体的に貢献した部分分かるよう具体的に記載してください。

【候補者氏名 _____】

II 【研究業績リスト】

原著論文(年順に記載、本人名にアンダーライン、責任著者に*印をつける。代表的な論文3編に○を付け、別刷りを添付)
著書・総説・論評・解説・書評・報告書・作品・ソフトウェア・データベース等
国内・国際会議招待講演
特許出願・取得
受賞
科学研究費補助金の採択状況
その他競争的資金の獲得状況
共同研究, 受託研究(競争的資金を除く)の受入状況

その他、業績として書き加えたい教育、社会貢献・国際連携、学会活動等の情報を追加しても構いません。九州大学の教員活動進捗報告システム(Q-RADeRS), Pure等のデータを利用して準備ください。

【候補者氏名 _____】

様式 3-A

推薦理由書 A

※候補者が作成依頼し提出する

候補者氏名 _____

推薦理由書作成者名 _____

所属機関・部局・職名 _____

候補者との関係 _____

住所 〒 _____

TEL _____

FAX _____

E-mail _____

| | |
|-----|------------|
| 署 名 | |
| | (推薦理由書作成者) |

※ 推薦理由書作成者は、候補者の研究をよく理解している研究者とし、少なくとも1通は候補者の所属機関以外の研究者とする（海外研究者であればなお良い）。部局長又は候補者と同一人物であってはなりません。

【候補者氏名 _____】

- 1 -

様式 4

令和3年度 ダイバーシティ・スーパーグローバル教員育成研修 (SENTAN-Q)

志望理由書

※候補者作成書類

| | |
|--|-----|
| 候補者氏名（部局名） | () |
| 本研修への参加にあたり、以下の事項について記入ください（全体で3ページ以内にまとめて下さい）。 | |
| 1) 本研修で実施する海外研修を含む国際的な研究・教育指導スキル向上のためのプログラムへの参加を希望する理由およびこのプログラムでの目標を記載ください。STEP4, STEP6 のメンター依頼先（海外研修先）について具体的な候補があればそれについても記載ください。 | |
| | |

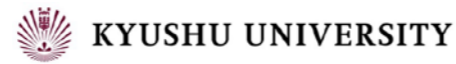
- 1 -

2) 大学教員（研究者）個人としてのキャリアプラン・将来像、その実現のために取り組んでいる活動などがありましたら具体的に記載ください。

3) 大学や社会を取り巻く新たな問題に対して、学生とともに教員も学ぶという本研修について、ご自身の考えを記載ください。

4) 社会や大学におけるダイバーシティ・インクルージブの重要性について、ご自身のお考えを記載ください。

5) その他、本研修に期待することや、具体的な質問事項などありましたら記載ください。



文部科学省科学技術人材育成費補助事業
ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ[※]（先端型）

ダイバーシティ・スーパーグローバル 教員育成研修 （事業名：SENTAN-Q）

令和4年度研修生（4期生） 実施要領

男女共同参画推進室作成
（作成日 令和4年3月7日）



1

研修の内容

- 本研修は、STEP1～STEP6で構成される
STEP1 研修生の選出
STEP2 大学ガバナンス、ダイバーシティ・インクルーシブ教育（国内研修）
STEP3 英語でのアクティブラーニング型教授法教育（国内研修）
STEP4 留学生への実践的研究指導（国内研修）
STEP5 最新学問分野等のリカレント教育（国内研修）
STEP6 最終試験：海外での実践的教育・研究指導（海外研修）
- 研修期間：各研修生につき原則2年 ただしライブイベントによっては延長可能とする
- 令和元年（1期生）より令和6年（6期生）まではJST事業として実施が確定済み
それ以降の継続は未定（JST事業期間内に60名程度の修了者を予定）
- STEP1～STEP6の修了認定がなされた教員には、総長より「認定書」が与えられ、修了から原則1年以内にテニユアトラック教員にはテニユア付与、テニユア教員には1段階の内部昇格が与えられる
- 本研修は、JSTダイバーシティ研究環境イニシアティブ（先端型）の支援を受け、九州大学が掲げる中期目標・中期計画、国立大学経営改革促進事業等にある「若手・女性・外国人」を中心に据えた経営改革の一環として、全学協力体制のもと遂行する。



3

研修の目的

- 本研修では、優れた研究業績を有する将来有望な本学女性並びに若手教員に対し、世界トップレベルの研究教育力を実践的に身につけさせることで、世界と伍して戦える真に実力のあるダイバーシティ・スーパーグローバル教員として育成することを目的とする。
- 具体的には、2-3年以内に上位職あるいは管理職に登用することが見込まれる部局推薦の優秀な女性並びに若手教員の中から、透明性の高い全学の審査会を経て研修生を選出し、原則2年間のダイバーシティ・スーパーグローバル研修を施し、目標レベルに到達した教員には認定書を与え、原則1年以内にテニユアの付与あるいは1段階の内部昇格を行うものである。
- 研修を通じて、国際通用性のある研究教育スキルが身につくとともに、将来上位職となった後に必要とされる幅広い知識の習得、男性女性ならびに文系理系教員の垣根を超えた学内ネットワークの形成、認定書付与による無意識のバイアスの排除が期待される。



2

研修の詳細(1/6)

STEP1 研修生の選出

透明性の高い全学審査会により、部局推薦者の中から候補者を選出する

- 応募資格者：次のいずれかに該当する女性又は研修初年度における年度末年齢が37歳以下の男性の准教授、講師及び助教
①部局ポイントで雇用されている者
②期間を定めて雇用されている者のうち、テニユア審査が予定されている者
- 応募期間：令和4年3月7日（月）～5月16日（月）
- 応募書類：様式1～4
- 全学審査会（ヒアリング）日時：令和4年7月上旬予定
場所：九大伊都キャンパス（詳細は後日連絡）
- 選考基準
①十分な研究業績があること ②学生とともに教員も学ぶという九州大学の理念に賛同し、大学や社会を取り巻く新たな問題に対して積極的に学ぶ姿勢を有すること ③海外研修を含む国際的な研究・教育指導スキル向上に意欲的であること
- 審査会メンバー：総長、大学役員、高等研究院特別主幹教授、外部有識者等から10名程度
- ヒアリング言語：英語及び日本語
- 審査時、審査委員に無意識のバイアスチェックシートを配布
- 採択人数（予定）：5-10名/年 原則として男女比1:1 文理融合クラス編成
- 採択者決定：令和4年7月上旬
- 採択者に対する研修のオリエンテーション：令和4年7月下旬
- 4期生研修開始：令和4年8月1日（月）



4

研修の詳細 (2/6)

STEP2 大学ガバナンス、ダイバーシティ・インクルーシブ教育 (国内研修)

目的 大学のあり方、社会における多様性・包摂生の重要性について、世界トップ大学の講師から学ぶ (必修科目)

ダイバーシティ・インクルーシブ教育

- 研修時期：研修1年目に実質1日の集中講義を1-2回開催
- 研修開催場所：九州大学あるいは福岡市内 (状況によってはオンラインで実施)
- 社会における多様性の重要性について学ぶとともに、インクルーシブの概念から生まれた様々なイノベーション事例について学習し、自身の研究に活かす。
- 講師は海外から招聘した有識者

大学ガバナンス

- 研修時期：研修1年目に実質1日の集中講義を1-2回開催
- 研修開催場所：九州大学あるいは福岡市内 (状況によってはオンラインで実施)
- 広く長期的視点に立った大学としてのあるべき姿、大学マネジメント等について、世界トップレベル大学講師 (副学長クラス) から講義を受ける



5

研修の詳細 (3/6)

STEP3 英語でのアクティブラーニング型教授法教育 (国内研修)

目的 世界トップレベルの研究機関からアクティブラーニング教授法について最新の情報を持つ講師から学ぶ (必修科目)

- 研修時期：研修1年目に2-3日程度の集中講義を1回開催
- 研修開催場所：九州大学あるいは福岡市内 (状況によってはオンラインで実施)
- 授業は全て英語にて実施 参加体験型授業
- 講師は海外から招聘した専門家または専門職員



6

研修の詳細 (4/6)

STEP4 留学生への実践的研究指導 (国内研修)

目的 世界トップレベル研究者をメンターとし、英語での研究指導法を実践で学ぶ

- 研修時期：令和4年8月開始で1年間
- 研修開催場所：研修生研究実施場所
- 留学生 (最大2名) に対して、研究テーマ設定~英語での研究指導~論文執筆までを海外研究者メンターのもと実施する
- 海外メンターは、原則として世界トップレベル研究者招聘プログラムProgress100の要件を満たす大学の研究者とする
- 留学生及び海外メンターの選定は、原則として研修生自身が行う
- 海外とのコミュニケーションには、Web会議システムが利用可能 (令和元年度に備品として複数人での会議が可能なシステムを男女共同参画推進室内に設置、端末の貸し出しもあり)



7

研修の詳細 (5/6)

STEP5 最新学問分野等のリカレント教育 (国内研修)

目的 AIやIoTなど最新データサイエンス、SDGs関連科目等、九州大学の研究教育重点課題等の中から自分の専門外分野を選択しリカレント教育を受けることで、周辺分野の視野を広げ、学際分野設立や拠点形成、予算要求など、上位職登用後の活躍の可能性を広げる。

- 研修時期：令和4年8月~令和5年7月の間に選択必修科目として2科目以上受講
- 実施場所：九州大学 各キャンパス
- 講師は原則九州大学学内教員とするが、研修生の希望によっては学外講師を招聘
- 文系教員は理系科目、理系教員は文系科目など、専門外分野の受講を基本とする
産学連携やアントレプレナーシップなど研究アクティビティの向上に関する講習についても受講科目に加える
- このSTEP5の受講はSTEP6の海外研修の後でも良い
- 講義は英語または日本語でアクティブラーニング方式で実施



8

研修の詳細 (6/6)

STEP6 最終試験：海外での実践的教育・研究指導（海外研修）

目的 SENTAN-Qの最終試験としての海外研修。これにより国際的に通用する研究教育スキルを身につけたかどうかを判定する。

- 研修時期：令和5年8月～令和6年7月の間に、原則8週間以上
- 実施場所：海外研究教育機関（原則協定校とするが、それ以外のトップ大学であっても良い）
- STEP6にはSTEP2～STEP4のプログラムを修了できた研修生だけが参加できる
- 海外研究教育機関での英語による専門科目の講義。授業実施が難しい場合は、海外複数大学でのチュートリアル講義で代行することができる。
- 海外研究教育機関での英語による学生指導。海外トップ教員をメンターとし、STEP4と同様、PIとして国際共著論文作成までを実施する。
- 研修先並びにメンターの選定は原則として研修生自身が行う
- 海外派遣に関わる経費はSENTAN-Qプログラムが負担する



9

追記

- 本研修は、女性並びに若手教員が、世界トップレベルの海外講師に直接指導を受け、自身の研究教育力を厳しく評価され、それをパスする経験をする事で、世界を舞台に他国の研究者と渡り合う自信を身につけることを目的とするもので、単に女性並びに若手教員の上位職数を増やすことが目的ではない。
- 世界の研究をリードする多様で秀逸な女性並びに若手人材を発掘し、育て、世界に向けてその実力を大きくアピールすることが最終目標である。
- 研修生は、この研修の趣旨を理解し、この研修の機会を最大限に活用して、自身の学びと目標達成に向けて努力してほしい。



11

研修到達度の評価方法

STEP2, STEP3, STEP5

- ルーブリック表などを使った研修の目標達成度の定量評価は、原則として担当講師に委ねる
- この際、研修生による「自己評価」も合わせて行い、研究内容の適性度について次年度のプログラムにフィードバックする

STEP4, STEP6

- 国際的に通用する研究教育スキルを身につけたかどうかの判定は、国際共著論文の達成度等を含めて、メンターである海外トップ教員が行う。

最終的な研修修了の認定（原則2年間の実施期間後）は、
審査会の下に置く実施委員会の審議を経て、総長が決定する



10

文部科学省科学技術人材育成費補助事業
ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（先端型）
ダイバーシティ・スーパーグローバル教員育成研修（SENTAN-Q）
「無意識のバイアス」チェックシート

「無意識のバイアス(Unconscious Bias)」とは、誰もが潜在的に持っているバイアス（偏見）のことです。生活環境の中で知らず知らずのうちに脳に刻み込まれ、様々な場面で人間の判断に影響を及ぼします。無自覚であるが故に完全に排除するのが極めて困難です。バイアスの対象は、性別、人種、年齢などさまざまです。組織や職場においては、人事評価（採用・昇格）の際に、マイノリティが不利益を被りやすい傾向が指摘されています。

無意識のバイアスの影響を最小限に抑えるため、近年採用試験等の前に審査員に対して無意識のバイアスに関する学習を義務付ける機関が増えています。このSENTAN-Qプログラムでも、審査員の方に、審査の前に「無意識のバイアス」について改めて意識をしていただくため、このシートを配布しております。

■ 審査に際し、以下の点についてご注意ください。

1. 無意識のバイアスは、人間性とは異なる、脳の機能に関連して引き起こされる現象です。自分も含め全ての人間が無意識のバイアスの影響下にあることを意識することで、バイアスの影響を回避できます。
2. 無意識のバイアスには、「先入観」によるもの、「同属性」によるものなどがあることがわかっています。また時間に追われていたり、疲れていたり、ストレスがある場合には、バイアスが強まることが知られています。
3. 審査に入る前に選考基準を明確にし、審査員間で共有することで、バイアスの影響を抑え、適正に評価を進めることができます。
4. 大学・部局の状況は時代とともに変化します。審査対象者が組織に適応するかどうかは、組織の将来像から判断ください。
5. これまでの様々な学術的評価などにおいてもすでにバイアスの影響が含まれている可能性があります。

SENTAN-Qでは、多様な人材を審査するため、審査員の多様性を確保しています。審査の際には、異なるバックグラウンドを持つ審査員の意見を尊重しつつ、「無意識のバイアス」に留意した審査を行っていただくようお願いいたします。

2019年 月 日

SENTAN-Q 審査員である _____ は、上記内容について了解しました。

(*このバイアスチェックシートはSENTAN-Q審査会に自筆サインをして提出ください。)

【参考】無意識のバイアスによって起こりうる”不都合“の例

(1)自分と同じタイプを嗜好する。

性別や出身地だけでなく、出身校や学生時代の部活などが同じ属性の人に対して強く親近感を持つ傾向。無意識のうちに好感を持ち、それが選考に大きな影響を与えている可能性は少なくない。

(2)性別、学歴、出身地、前職社名など、採用基準とは関係のない属性に影響される

特定の属性は、特定の代表的なイメージを想起させる。〇〇大学の学生は地頭がいい、〇〇社出身者はアントレプレナーシップが強い、といったイメージを描き、それが求める人材要件と関係なくとも、採否に影響を与えることがある。

(3)応募者にこれまでに会った“似たタイプ”を投影する

顔や表情、経歴などがこれまで会った人に似ている場合、本来はまったく関係がないにもかかわらず、応募者の評価に影響を与える。たとえば、応募者が昔の上司に似ていることが、ポジティブにもネガティブにも評価を歪ませることがある。

(4)面接で“思い込み”を裏付けるデータを収集する

バイアスによって、面接の最初の数分で「こういう人だろう」と判断してしまう。その後の質問は、その仮説を検証するために行われる。ネガティブな印象を持った相手には、ネガティブな回答が返ってきそうな質問を繰り返すことすらある。

(5)昇進の要件を能力ではなく属性で見る

昇進を検討する会議などで、男性の名前が真っ先に挙がる。日本人以外の名前が挙がらない。このような現象が起こっている企業では、純粋に能力や成果ベースではなく、属性による評価が影響していることを疑ったほうがいい。

(6)属性によって過剰な配慮をする

「ワーキングマザーに海外出張や駐在は無理」「若手（あるいはシニア）にこの仕事は重荷だ」というように、個人の状況や能力をつぶさに見ることなしに、過剰な配慮によって与えられるべき機会が失われていることがある。

(7)自分の属性によって昇進に自ら限界を設ける

「女性だから昇進は無理」「自分の出身大学では係長止まり」など、自分の属性によって自分に限界を設けた結果、実際にそのような状態に留まる。男性管理職ばかり、有名大学出身の役員ばかり、という状況が予言の自己成就を生む。

(8)他人に対して横柄な態度をとる(マイクロ・アグレッション)

日常会話や出会いの中で、他人に対して横柄な態度をとること（話の最中に度々口をはさむ、目の前にいるのにその人の存在を無視する、本人の前でその人を代弁する、間違えた名前を呼ぶ、等々）。当人には自覚がなく、対象となる人への無意識のバイアスの表れ。

出典:

(1)-(7)「正しい評価を阻む無意識のバイアス」より抜粋 (Works No.150 Oct-Nov 2018 p.10-13)

https://www.works-i.com/works/item/w150_toku1.pdf

(8)男女共同参画学協会連絡会リーフレット「無意識のバイアス-Unconscious Bias-を知っていますか？」より

抜粋 https://www.djrenrakukai.org/doc_pdf/2019/UnconsciousBias_leaflet.pdf